

Title	<批評・紹介>森谷克己著「中國社會經濟史研究」
Author(s)	宮川, 尚志
Citation	東洋史研究 (1966), 25(1): 115-118
Issue Date	1966-06-30
URL	https://doi.org/10.14989/152713
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

グース民族に特徴的にみられる遷住の意味を考え、曾つて稻葉博士によって唱えられた満洲民族の文化還元性論の不充分さを衝き、白鳥庫吉博士の南北對立論にまで言及した史論を展開されている。扶餘から清朝まで、滿洲から起つたツングース民族の歴史について、その性格や特質をえぐり出したもので、著者の滿洲史に對する考えが最もよく現われているといえよう。

附録の五は「滿洲國成立過程の一考察」である。これだけが戦前、それも昭和十一年という古い時期に發表されたもので、僞作説の多かつた滿洲國號に對する從來の説の批判から始めて、マンジュ國の存在を確かめ、その社會の基礎を究明しようとした、當時に對しては頗る斬新で、新進氣鋭の研究者として甚だ意欲的な論文であつた。附記にも記されている如く、滿洲社會に對する著者の見解は他の論文と大部違つているが、著者のこの分野の研究の出発點となつた記念すべき論文として、特に卷末に載録されたようである。ただマンジュ國という名稱の存在の根據を老檔及び原檔の記事においていられるのであるが、前述の原檔についての廣・李兩氏の研究によると、原檔自體その性質はそれ程簡單でないようであるから、今後なお原檔との検討を要するかと思ふ。

以上本書に収録されている各論文について一應の紹介を試みたが、要するに清の太祖の後金國の成立に至る過程の諸問題について、主として社會史的に考察したもので、頗る創見に富んでいる。そして著者の基本的な考え方は、當時の滿洲社會は狩獵を主生業とする氏族制であるということである。この考え方は本書の全體を通じて極めて強く打出されていて、すべてこの立場に立つて議論が進められている。ただ著者は、ツングース系民族社會の特質を把握す

るため、狩獵を餘りにも強調されるのであるが、昨年史學會大會の東洋史部會の席上、江嶋壽雄氏も言われたように、農耕の面をもも少し考慮するとともに、中國文化の影響についてもやや意を用いてもよいのではないかと思ふ。

なお著者は自序の中で、入關後の清朝史の展望を試みられているが、今後大清國の問題をも取上げて頂くよう念願してやまない。淺學菲才、紹介宜しきを得ず、徒らに妄評を加え、著者の意を誤り傳えてないかと恐れるが、切に寛恕を請う次第である。(神田信夫)

中國社會經濟史研究

森 谷 克 己 著

昭和四十年十一月
A5判 一七九頁

本書は故森谷克己(一九〇四—一六四)教授の晩年の論文五篇と著者の談話の抄録である「研究生活を顧みて」一篇を合わせて、遺族の方々により刊行されたものである。なお長男森谷宇一氏(東京都中野區沼袋四丁目二〇ノ一二)等、二男二女の父に對する「追想」と女婿子安宣邦氏の後記、著者の年譜(著作目録共)を附する。頁數は一七九頁。開卷に著者が岡山大學法文學部教授在任中の遺影と、京城大學時代の知友、鶴飼信成博士の序を載せる。この序は題して「正義と誠實の人」という。著者の知遇と示教とをこうむつた私は、この評はけだし適切だと共感する。

著者は二十一歳、あたかも治安維持法公布の年に、クノー「マルクスの民族・社會並に國家觀」(同人社刊)の翻譯を出版されて以

來、唯物史觀に關する論者の紹介に努め、平野義太郎氏との共譯に成る、ウィットフォーゲル「解體過程にある支那の經濟と社會」上・下卷（中央公論社・一九三四年）、同「東洋的社會の理論」（日本評論社・三九年）の翻譯、支那社會經濟史（東京章華社・三四一年）、東洋小文化史（白揚社・三八年）、アジア的生產様式論（育生社・三八年）、東洋的生活圈（同・四二年）、東洋的社會の歴史と思想（實業之日本社・四八年）、社會科學概論（法律文化社・五三年）の著書によって日本における中國・朝鮮社會經濟史の發達に貢獻されてきた。

收載の諸篇について簡単に述べよう。

○中國史における繼起的諸社會の經濟的構成——時代區分の問題に寄せて——（岡山大學法經學會雜誌三二・五七年）本論文は著者が終戦後、全ての職書を失つて内地に引き上げ、愛知・廣島大學教授を経て、岡山大學法文學部長として學部を清整したのち、當時東洋史家の間に流行した時代區分論の刺激もあつて、日本・新中國の諸説を擧げ論評する。マルクスのアジア的生產様式を、農業共同體（耕地共有と定期的割替が行なわれ、耕作者は各自の計算で耕作し、その諸結果と家屋・園圃宅地とは私のものとなる）、すなわち始源的社會構成から私有に基礎をおく二次的構成への過渡期であるとなす著者の持説は變らない。そして仰韶期に農業共同體が始まるとし、それは邊境においては、「華夏」の國家發生後も長く存続したと見る。奴隸制時代については、周以前から認むべしとなし、この點では舊説を改めている。そして西周をもつて封建制生產様式の起源とするのは、また舊説に従っている。商鞅の改革をもつて「井田」徭役制の廢止、生産物地代の始めとして言を結んでい

る。文中、前田直典・内藤戊申・西嶋定生・加藤繁諸氏及び多くの中共史家の説を述べつくし、かつて著者の説を空論と評し去つた故前田氏の用いた「半奴隸的農奴」という概念の矛盾を衝いている。

○中國歴史における封建制生產の諸時代序説——（岡山大學創立十周年記念論文集下。五九年）は、舊著で三種の漢譯が出た「支那社會經濟史」改稿の試圖の一部として書かれたものである。前論文と重複する點もあるが、原始的諸共同體の分解の方向につき、マルクス・エンゲルス・レーニンのほか、マックススウェーバー・ウィットフォーゲルの學説を參照し、著者の廣い視野を示す。しかし著者は股代に原始的共同體的秩序が奴隸所有者經濟の方向へ分解したとの説に違しなから、范文瀾がそれと同時に、夏・商に封建的萌芽をも認めるという説に注目する。そして唐末まで奴隸時代を下げんとする日本學者の一部の特有の解釋を退け、總體的奴隸制は全員臣隸制即ち東洋的絕對主義の別名となし、西周を「未熟な」早期封建主義の時代で、多分に氏族秩序を混入し、親戚封建を主とし、生産諸力が未發達で、犁農以前の耒耜農の段階で、直接生産者は生きた労働の形態で公家により搾取され、集團的徭役が行なわれたという。

○秦漢の社會經濟的構成の問題と中國史學會（界？）（武藏大學論集一一卷一・二號、六三年）學部長再選を辭した著者は學内行政に時を割かれずに晩年を研究生生活に捧ぐべく東京武藏大學に惜しまれて轉出されたが、これはその後の第一の作であり、前論文同様、日・中・ソの諸學者の説を博渉し、著者の堅持する歴史理論と漢文・ロシア語の研究に携まなかつた努力によつて成つたものである。前田・西嶋兩氏説の差異（前者が小作と對立する奴僕經營の優勢を説

くの對し、後者は優勢な小作の奴隸的地位を強調する、西嶋氏のその後の論點移動——皇帝權力下の土地保有農氏の奴隸的被支配状態の主張から生産者大衆が奴隸でも農奴でもない人民だという見解——と、史的唯物論者の中で侯外慮の説のみ「實りある」と認め、増淵龍夫氏における「公田」の假作諸關係の究明不十分を指摘した。なお五井・宇都宮・濱口氏の説に觸れつつ、著者として秦漢を官僚制的封建主義とする從來の見解を再確認する。

○中國社會經濟史における官僚制的封建體制の成立（同前、一二卷二號、六四年）前論文に引きつづき、本論文では春秋戰國時代における早期封建諸國の争覇と中國文化圏の擴大のうちに、鐵器の導入・灌漑による生産諸力の發展は、農工・商賈の分業を進め、「土」の社會群を發生させた。隋唐に至り完成する官僚制的封建主義は次の秦漢時代に始まる。しかし直接的生産者に對する生産諸條件、所有者の直接關係を見れば、これは本質的變化ではない。ただ國家體制における郡縣制は前漢初の一時的な封建主義を變形し、封建的階層未發達のまま官僚制約集權化の道をたどる。戰國以後の文獻で判るように直接生産者の主要大衆は五口の家庭を持ち百畝の田を耕し百石を收穫するのが標準である農奴である。中國史家の論ずる漢代奴隸の意義については、翦伯贊等に同意し、最主要的役割はなかつたというが、范文瀾のいう奴隸の給源が破産農民の一部にすぎないという説には批判的で、俘虜と關係深いと考え後考を期する。しかし著者の考えが十分に結實しなかつたことが惜しまれる。

○朝鮮歴史經過の大要とその諸時代の經濟的社會的構成（朝鮮研究一九六四年八月）著者の在鮮は二十年に及び最も活動的な期間であった。令愛、子安美知子氏の「父を憶う」によると、著者は胃がん

手術の朝、遺言に「自分の朝鮮史研究は餘人の追隨を許さないものだ」と自負する」と聲を大にして言われたという。私は私なりにこの言を理解できるように思うし、笑道の徒がこういう壯語を聞きひきおこす一般的反應に對して説明する用意もある。ただ本論文は朝鮮史を學習する者に對し、木を見て森を見ないことのないように執筆された好個の概説であるが、叙述は新羅統一時代に終る。前程遠くして死に拉致された著者を悼む氣持が先に立つ。

中國戰國期文化の影響下に始源的階級國家、箕子朝鮮ができ、衛氏時代は多分に奴隸制度を混入した早期封建主義で、漢の郡縣設置により官僚制的封建主義になった。これにつづく三國の國家體制については、高句麗は多分に封建主義的で、百濟は多分に官僚制的であるが、ともに外因性（征服）國家であり、新羅は内因性で封建主義が強い。しかし三國分立の時代を奴隸所有者經濟と考ふる説に對して著者は否定的である。當時の半島の直接的生産者の主要大衆は、強度な原生的共同體を保存する一方、經濟外的強制下にあり、租調・徭役を負擔した小農民だと説く。そして新羅の統一とその官僚制的國家としての發展を述べ、七八八年の讀書出身科設置をその形成上の重要な契機と指摘している。

「研究生活を顧みて」（朝鮮研究月報シンポジウム）によれば著者は「李朝實錄」全部をよみなすような専門家たらんとしたのではなく、經濟學・唯物史觀の造詣を朝鮮史に適用せんとしたものが、史料の少い古代については、中國史の場合と同様、原史料に忠實に基いて論を進められている。

著者の中國・朝鮮史の見方はかなり早くから固まっているようだが、晩年において日本の後進學者の説に耳を傾け、外國文獻にも目

を通し、改むべきは改め、改める要ないと思えば持説を確認して
 いる。これは學者の研究の進展の一の型として私は興味深く思う。決
 して著者の學問が早期に固定し停滞したわけではない。

著者は學生や若い學徒と語り論ずることを大變好まれた。かつて
 岡山で、ある學徒と學生（東洋史專攻でない）が著者の舊論文に矛
 盾を發見したと得意になつて言うので、私が調べたところ、誤解か
 つ取るに足らぬ事なので、たしなめたことがあつた。しかし著者は
 「この學生にも自分の論文を批判的に讀んだものがある」と言つ
 て喜んでおられた。

さて私は實はこの遺稿集の書評をするのにあまり適しているとは
 自分でも思わない。しかし私の前著、六朝史研究政治社會篇を讀ん
 で下さつて、婉曲にして適切な評語を與えられたことを思い出すに
 つけても、恐らくはまだ多くの人々に知られていない本書の刊行さ
 れたことを、著者が長年にわたり熱心な會員であられた本會の誌上
 において、紹介することは避けてはならない義務であると感じずる。
 日本の中國社會經濟史研究の歴史の上に永く名を留めるであらう森
 谷克己教授の業績が新しい世代の學者によつて乗り越えてゆかれる
 ことを、誰よりも故人が望まれることであらうと信ずる

（吉川 尙志）

東洋史研究叢刊

第十五 唐王朝の賤人制度

濱口重國 著

本文 五六〇頁 定價 二七〇〇圓
 十月中旬發賣豫定

第十六 中國古代の田制と税法

平中荅次 著

本文 五〇〇頁 定價 二五〇〇圓
 十月下旬發賣豫定

第十四 清朝前史の研究

三田村泰助 著

本文 四九二頁 定價 二五〇〇圓
 右書御希望の方は本會までお申込み下さい

京都市左京區吉田本町京大文學部内

東洋史研究會

振替 京都 三七二八番